

それでも続ける

北海道

真駒内少年剣道会

中学2年 遠藤 かのん

「もうやめたい！」

そう思ったことは今まで何度あったらうか。

試合終了。また負けた。中学に上がってから、試合に勝つことが難しくなり、一回戦すら突破出来ないことも多くなった。

でも、試合に負けても悔しさではなく、恥ずかしさを抱いている自分がいた。

私は、「負ける」ということに慣れてしまっていた。

そんな時、家に帰ると「最近、練習に身が入っていないように見えるけど、剣道いやならやめたら？」

と母に言われた。

私をいつも応援してくれている母。その母の言葉は、私の心に深く突き刺さった。

見透かされている。どう言い訳しても無理だ。

たしかに、私は中学校に入ってから塾にも通い出し、剣道ができる時間が減った。

環境が変わり、剣道以外にも楽しみが増え、やるべきことが多くなったのを言い訳にして、毎日やっていた素振りもサボりがちになった。気がつくとき心の余裕がなくなっていた。

そして、稽古は楽しいものから義務的にこなすものに変っていた。

この時、初めて、「やめたい！」と口に出した。口にすれば、すっきりして、このもやもやした気持ちから解放されると思っていたが、なぜか目の奥が熱くなった。

しばらくの沈黙の後、「かのんの思い通りにしていいよ。やめてもいいんだよ」と言ってくれた母に救われた。

一度立ち止まって、自分を見つめなおす機会をもらえたと思った。

私が悩んでいた時、妹の剣道の試合があった。この日は、妹にとって初めての試合だった。妹が一本を取った時、私も自分のことのように嬉しかった。妹は、人目を気にせず、嬉し泣きをしていた。試合を終えた妹は、今度は、負けて悔し泣きをしていた。そんな妹の姿が昔の自分と重なった。私が、忘れかけていた気持ちはこれだったのではないか。

上級生に打たれて泣いた低学年のころ。私より遅く剣道を習い始めた子に負けて悔しかった時。仲間が次々と結果を残す中、ただ見ていることしか出来なかった自分。何回も辞めたいと思っていたはずなのに、何回も剣道が嫌いと思っていたはずなのに、なぜか、頭の中では、剣道の楽しかった思い出が浮かんでは消えていく。

剣道を通じて出来た友達。

試合で負けた時にも、隣で寄り添ってくれた仲間。

強くなれるよう熱心に指導して下さった先生方。

稽古が厳しくなることも増えたが、一人の選手として見てもらえたことが嬉しかった。

そして、共に悲しみや喜びを分かち合ってくれた家族。

全てが私の宝物であり、剣道を通して得たものだ。

小学一年生から始めた剣道。勝ったり、負けたり、かけがえのない仲間が出来たりと、気付けば剣道は私の生活の一部になっていた。勝負のむずかしさや礼儀作法を教えてくれたのは剣道だった。道場の雰囲気、先生や仲間の温かさ、優しさ。そのどれもが私は好きだ。

今までの私は、負けたことを環境や周りのせいにしていた。だけど、もう逃げない。限られた時間の中で、周りに流されることなく、好きと思える剣道を貫いていきたい。昔の私のように。

一度は剣道をやめようと思った私。でも今は違う。どんなことがあっても。それでも続ける。前に進む。

今の私なら「剣道が大好き」と胸を張って言うことができるだろう。

そう思いながら今日も私は竹刀を握る。